

日本語の文法・談話と場の理論

大塚正之
(早稲田大学)

場の理論の背景

ニュートン力学と近代科学

場の量子論と複雑系科学

○個物と因果関係

- 個物の位置と運動量を同時に確定できる。

○要素還元主義

- 事物は要素に還元し、それを集積すれば、全体が分かる。

○場と相互作用

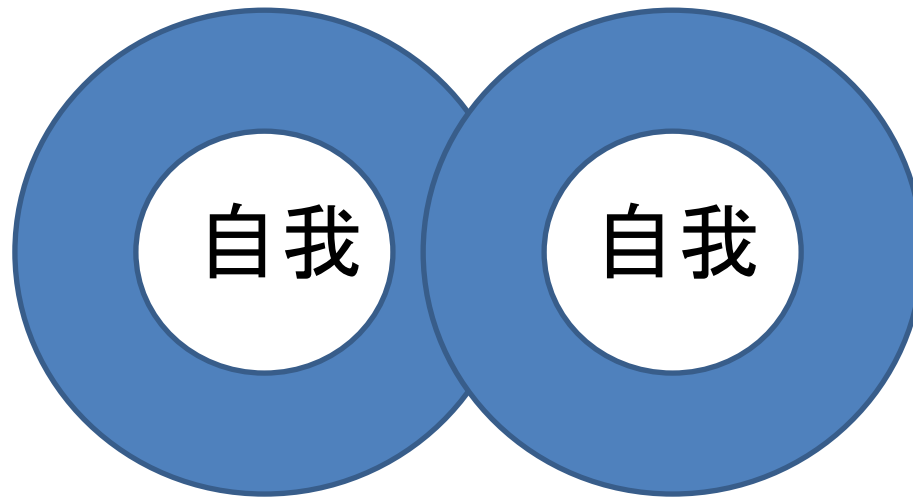
- 個物の位置と運動量は同時に確定できない。

○全体は部分の寄せ集め ではない

- 部分を寄せ集めても全体にはならない

場の理論の基盤

自他の相互作用



主客(心身)の相互作用
自然とヒトとの相互作用

現代諸科学における場の理論

- **物理学**における場
- 粒子は場を創り、場は粒子に作用する(場の量子論)。
- **生物学**における場
- 生命体は、環境の影響を受けるだけでなく、環境を積極的に生みだすことができる。例えば、ある細胞がケモカインという物質の濃度勾配をつくることで、他の細胞が集まれるような「場」を形成する(「場」の生物学1999:多田富雄)
- **心理学**における場
- 人間の行動は、個人の特性(P)と環境(E)との相互作用である(Field-Theory:場の理論:クルト・レヴィン)
- **脳科学**における場
- 主観的体験は、多種多様なニューロンの活動によって生じる場である(意識を伴う精神の場[CMF]の理論:ベンジャミン・リベット)

Conscious mind as a force field (B.Libet 1993・1994)

無意識 → 言動 → 意識(awareness)
↓ ↑ (500ms)

意図

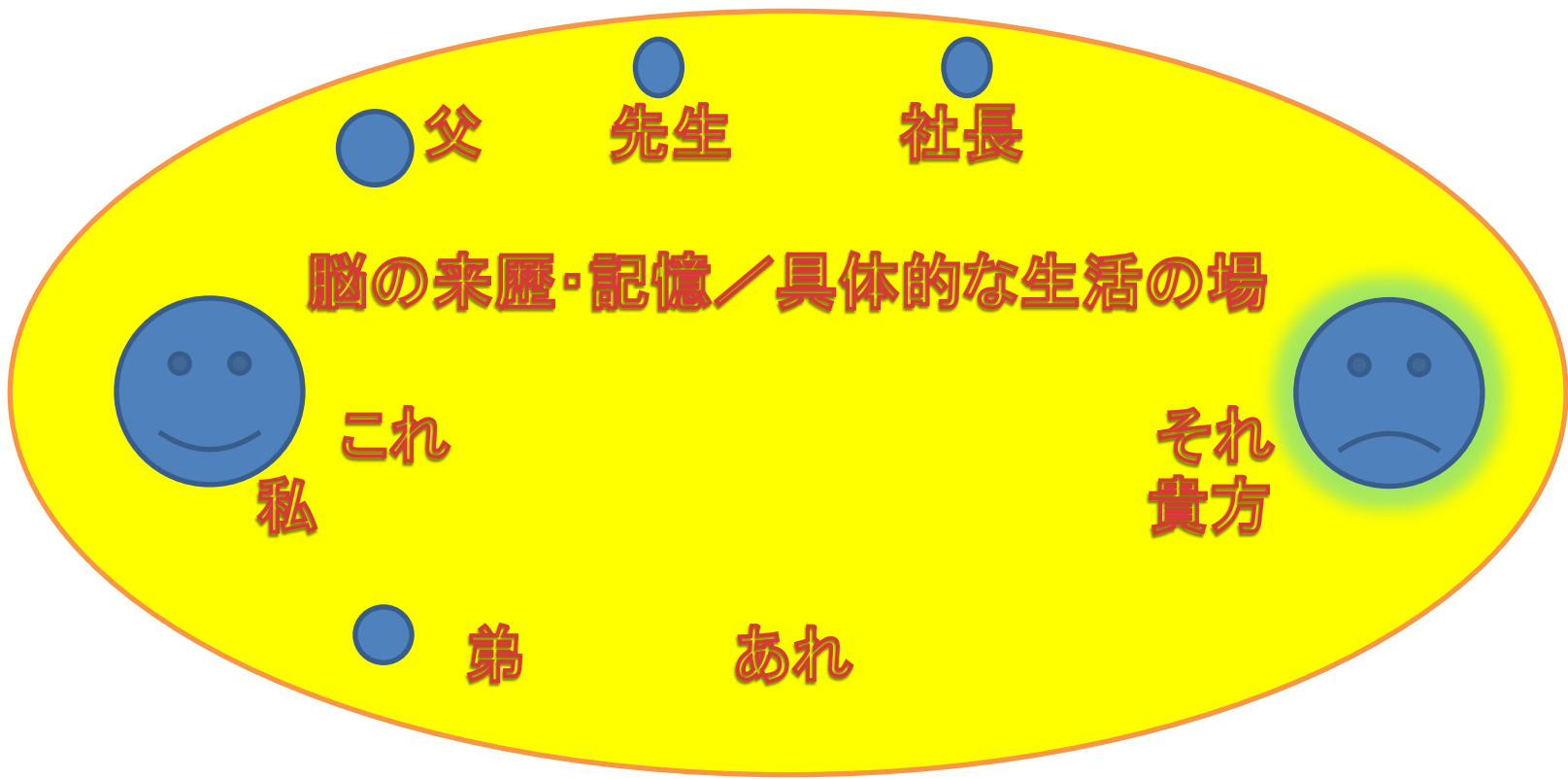
遺伝子(ユングの原型/蛇への恐怖感など)

脳の来歴(シュッツの沈殿/メルロ=ポンティの相互身体性)

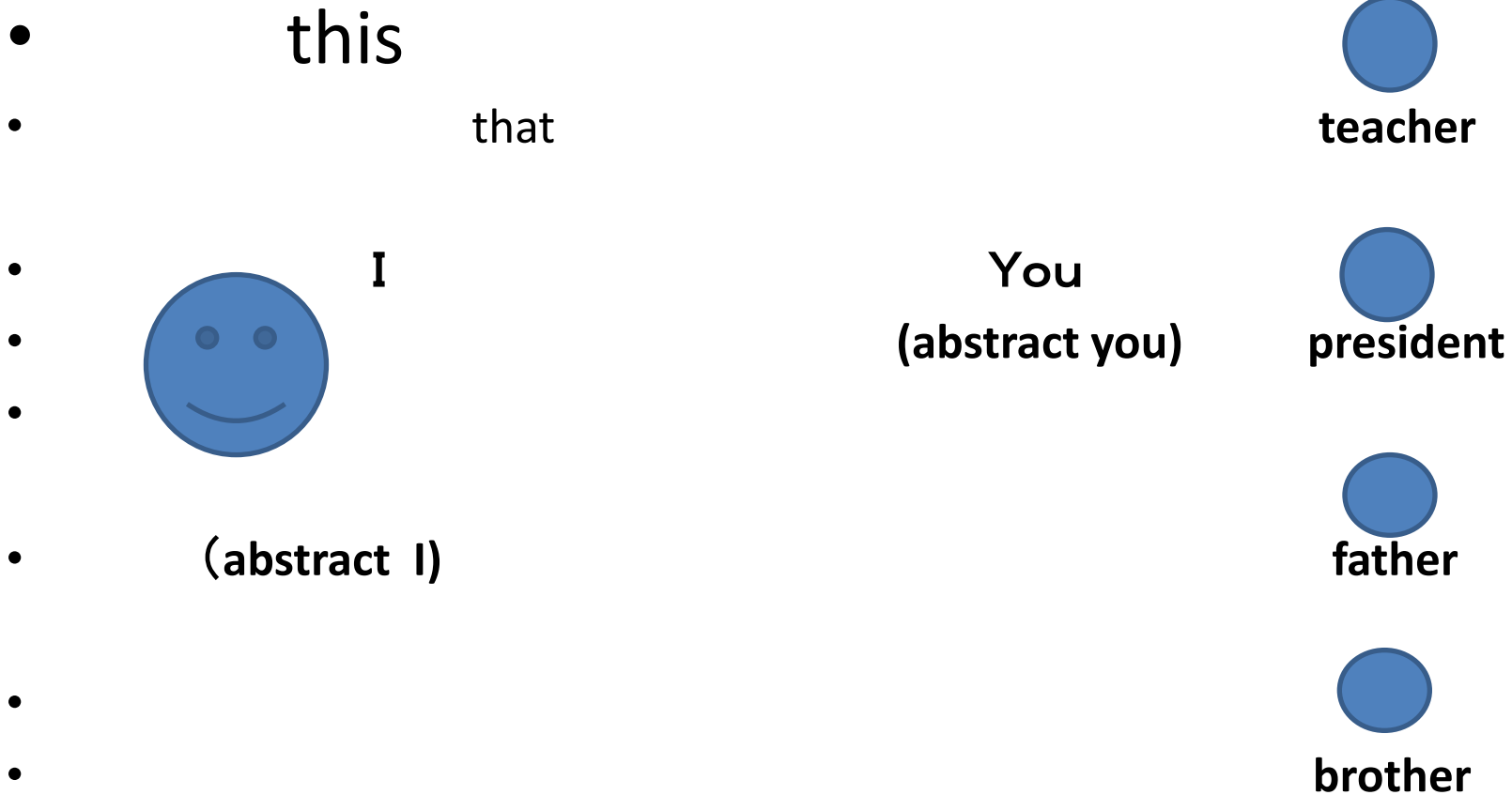
具体的な場の状況(コンテクスト)

言語学における場の理論 場と状況・コンテクスト

- 場のイメージ図（日本語）



英語のイメージ図



言語学における場の理論

場と状況・コンテキスト

- 自然言語の**多義性** = **コンテキスト依存性**
(cf. 細胞の**多義性** = **アクチビン濃度勾配依存性**)
- ことばの意味は、場によって作られる。
(**具体的意味** → **抽象的意味** / **具体的操作** → **形式的操作**)
- 場におけるコミュニケーションの構成要素の1つとしてことばがある。
ことばの具体的な意味は、場における**非言語的要素**と**不可分一体**のものとして考えなければ分からない。
(五感で感じられないものは、理解が困難である。ことばの意味は五感による具体的な知覚及びそのメタファとしっかりと結びついている)

場と日本語の文法

- **言語過程説からみた日本語の文法の特徴**
- (中村雄二郎・時枝誠記)
- ①日本語では最後の**辞(主体的表現)**によって包まれる(主観性を帯びた感情的な文)
- ②日本語の文は、辞によって**主体と場面**に繋がる(場面の拘束が大きい)
- ③日本語の文は、**詞+辞という主客の融合**を重層的に含む(体験を深めうるが概念的世界の構築に不都合)
- ④日本語の文は、詞+辞の構造により**主体は辞の働き**として見出される(主語が不要)

- **■日本語は、今・ここという具体的な場の拘束を受けているので、具体性・主観性が強く、非言語的な場面の果たす役割が大きいと考えられる。**

日本語の談話と場の理論

- 場における**談話者相互の関係性**が日本人の言動に大きな影響を与える＝相手がどのような社会的な場所にいるのかによって言動に差異が生じる。
- **場所のルール**(主体的合意によらない場所の規則)
- (例)郷に入りては郷に従え・学校では規則に従いなさい・目上の人への礼儀作法と言葉遣い・披露宴の席順・車の着席位置など
- 日本社会は、世間という場所のルールの拘束が強く、具体的な場面ごとに言動を変える。使うべき言葉が異なる。この場のルールをわきまえないと、ことばがなっていないと叱られることになる。